

「NPO Liaison Academia 2008 総会」に寄せて

嬉しいご案内ありがとうございました。

ご念頭の日米高齢者チームケア支援の御起業、誠におめでとうございませう。社会的にニーズが高く、ダイナミックで、心あたたまる事業に理事として参加させていただきます事をこの上なく光栄と存じます。

私の母は2004年の12月15日94才で他界しました。90才の時、骨折がきっかけで、入院、退院を繰り返しておりました。高齢者が病院で長期入院するメリットは数多くあります。医療・介護スタッフは心強い存在ですし、充実した医療施設なども家族を安心させます。しかし、病院では万人向けの介護態勢しかとれません。致しかたないこととはいえ、とくに食事（栄養）の問題は、母の闘病生活において見逃せない問題でした。長期入院となると、ベッドに横になったままですから、ますます食欲がなくなり体力は落ちるばかりです。そこで、私は在宅介護を決意しました。

高齢者を介護するのは大変なこともありますが、素敵なこともたくさんありました。それは、「親と素敵な時間を共有できる」ということです。朝は「行ってらっしゃい」の言葉に送られ、帰宅すれば「お帰りなさい。お疲れさま」の言葉で迎えられ、それだけでも充実した日々でした。

とくにお茶の時間には、私自身忘れていたような、小さい頃の思い出話をしてくれました。母がいちばん手を焼いたのは、私が何か熱中すると、“好きなものでも食べなくなる” “小柄なわりに声が大きく、泣くと長泣きであったこと” など楽しそうに語る母の笑顔が忘れられず、その笑顔を見ることが私の生きがいにもなりました。

ようかんが好きだった母はいつも3時のおやつにようかんを食べるのを楽しみにしていました。ところが寝たきりになり、咀嚼・嚥下能力が少しずつ衰えていき、好物のようかんは固くて、食べたくても食べられない状態になりました。すると3時のおやつのお楽しみがなくなり、口数も少なく、「好きな物が食べられないくらいなら、死んだ方がいいわね。」とつぶやくようになりました。

「食べることは、人生楽しみの一つ」とも言われています。私は、はっとして、ようかんを「うらごし」してラップで茶巾にしぼり、ヨーグルトをソースのようにそえて、母にすすめました。母は一口食べて「これはオリジナルね。とて

も食べやすく、おいしい」といい「もつとないの?」と、おかわりして、途端に口数が多くなり、元の元気を取り戻しました。

高齢者が寝たきりになり、とくに認知症になると、「生命維持」に必要な栄養確保ができないという点だけではなく、精神的、心理的な満足感も得られなくなります。そこで、高齢者の身心両面ともに満足感が得られるよう、日常的な栄養面でのケアも絶対に欠かせません。生きる力は食から得られるのです。

こうした観点からも、高齢者の皆様の暮らしに少しでもお役に立てることを願って、NPO Liaison Academia の高齢者チームケア支援事業に熱意をもって参加させていただきたいと思います。

平成 20 年 2 月 9 日

NHP OCHIAI OFFICE

代表 落 合 敏
栄養学博士

A handwritten signature in black ink, appearing to read '落合敏' (Ochi Nobuhiko), written in a cursive style.